

最新設備や技術を軸に他院とも連携し 脳腫瘍や機能的疾患への高度な治療を提供

三愛病院は、高い技術で脳神経外科手術を行いながら、他院と協力して、パーキンソン病などの機能的疾患の治療にも取り組んでいる。済陽輝久理事長、脳神経外科の小原琢磨部長、提携しているおちあい脳クリニックの落合卓院長に話を聞いた。

覚醒下手術やガンマナイフなど 高度な脳神経外科手術を実施

三愛病院は、埼玉県の脳疾患治療において、多くの救急患者を受け入れるなど、積極的に地域医療に貢献している。「目標は埼玉県の脳疾患の患者すべてを、当院を含めた県内の医療機関で引き受けることです」という済陽輝久理事長。そのため力を尽くしているのが脳神経外科の小原琢磨部長だ。術



済陽 輝久 理事長
わたよう・てるひさ ●1975年、東邦大学医学部卒業。同大学整形外科日赤医療センター麻酔科などを経て85年に三愛病院設立。97年、医療法人社団松弘会理事長



小原琢磨 脳神経外科部長
おばら・たくま ●1990年、浜松医科大学卒業。06年10月、三愛病院に勤務、脳神経外科部長。埼玉医科大学総合医療センター非常勤講師など



落合 卓 院長
おちあい・たく ●1996年、山口大学医学部医学科卒業。東京女子医科大学脳神経センターなどを経て、09年におちあい脳クリニック開院

中に麻酔を調節して患者の意識を戻し、会話を通じて重要な機能を司る部位を避けつつ病変を切除する覚醒下手術など、高度な手術を可能にする技術を持ちながら、他院とも積極的に連携を進める。その軸になったのは、2004年に導入したガンマナイフだという。「ガンマナイフは、開頭することなく、深部の脳腫瘍を治療できます。導入以来、他院からガンマナイフ治療の対象になる患者さんを紹介

されるようになり、そこから交流を深めていきました」と小原医師。もちろん、院内の連携も十分取られており、ガンマナイフと外科手術を組み合わせ、より負担の少ない治療を心がける。「埼玉県の脳神経外科は年々レベルが上がっています。県全体で協力して治療すれば、オーダーメイドかつ高度な医療が展開できます」と小原医師は強調する。

機能的疾患への治療に 他院と協力して取り組む

そうした連携が要となる疾患に、神経組織の異常を原因とする機能的疾患がある。代表的なものは、ふるえやこわばり、動作異常などを引き起こすパーキンソン病だ。「機能的疾患の治療は、手術だけでは完治がむずかしい場合が多く、その後の心のケアが求められます。外来診療の受けやすいクリニックで、丁寧に診ることが大切です」と語るのには、三愛病院と提携するおちあい脳クリニックの落合卓院長。落合院長は「パーキンソン病友の会」で講師を務めるなど、パーキンソン病の治療を得意としている医師だ。

人の医師が初診から手術、術後のフォローまで引き受けることが求められます」と落合院長。それには、あらゆる状態への対応が求められるため、三愛病院の施設も使い、治療の幅を広げているという。「磁気パルスで神経異常の改善を目指す磁気刺激療法のような、外来で

可能な治療は自院、脳深部に電極を埋め込んで神経を刺激する脳深部刺激療法(DBS)のような、手術を伴う治療を三愛病院で行っています。逆に、急患として三愛病院で治療を受けた患者の術後ケアを受け持つなど、互いの長所を生かして診療している。

患者本位の姿勢で 最新の医療を追求

「最先端技術の導入、他院との連携など、幅広い取り組みができるのは、患者さんのために必要ならあらゆることを行うという姿勢が全員にあるからです」と語る済陽理事長。同院は、そのためのフォロイも充実させている。MRIやCTなどの画像診断を担う診療放射線技師や、医師の事務作業を代行するドクター秘書など、多くのスタッフが、それぞれの技能を生かし医師をサポートしているという。

各スタッフが一丸となって来院した患者を治療するだけでなく、埼玉県の医療機関とも協力して最善の医療を追い求める。その徹底した患者本位の姿勢は、三愛病院の理念の1つ「患者さんへの奉仕」の実践でもある。取材／鈴木健太

最新MRIを活用した正確な画像診断

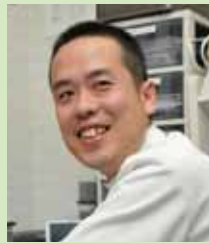
脳疾患の治療には、手術の技量だけでなく、正確な診断も欠かせない。同院の診断を支える石井忠技師、大塚忠義技師、長谷川秀史技師に話を聞いた。



石井 忠 診療放射線技師
健診部長



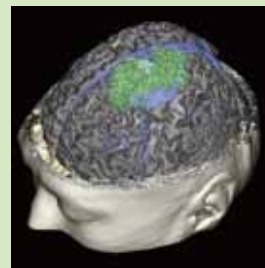
大塚 忠義 診療放射線技師
放射線科部長補佐



長谷川 秀史 診療放射線技師

三愛病院では、0.5mmの血管も鮮明に描き出せるMRI3.0Tを中心とした、緻密な画像診断を実施している。「MRIは、パーキンソン病の治療計画立案や、脳動脈瘤の位置・状態の確認などには欠かせません」と説明する大塚忠義技師。さらに、正確な診断結果を導き出すためには、異状が見つければ、技師の判断でさらに詳細な検査を施行するなど、技師にも技量や知識が求められるという。「異状を見逃さないよう、撮像した技師本人に加え、もう1人の技師が分析するという、二重のチェック体制で検査に取り組んでいます」と長谷川秀史技師は語る。

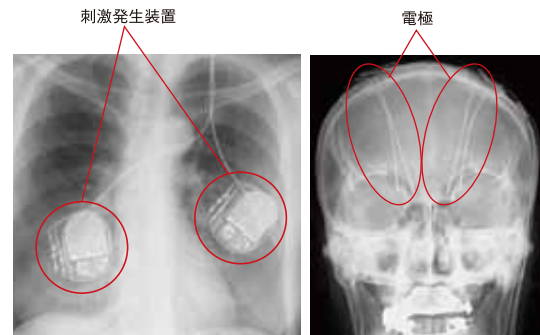
また、迅速な診断も心がけており、来院した患者が急を要する症状だと判断すれば、時間を作って優先的に診断する。「当院では、撮影当日に診断結果を出すよう心がけています。患者さんの不安を取り除くために最善を尽くすのは医療従事者の使命といえます」と石井技師は強調する。



MRIで撮像した脳腫瘍(大きさ70mmの巨大髄膜腫)の画像。ワークステーションで画像処理し、より緻密な3D画像を作成している



11年8月に三愛病院に導入された最新ガンマナイフ・パーフェクション。ガンマ線の精度も0.05mm(髪の毛半分)という、他の放射線治療と比較しても群を抜く治療精度である。



神経を刺激する電極を脳に設置する(右)脳深部刺激療法。胸部に刺激発生装置が埋め込まれる(左)



落合院長は外科手術にも高い技術を持つ

脳機能の疾患に取り組むおちあい脳クリニック

おちあい脳クリニックは、パーキンソン病、てんかん、ジストニアなど、脳機能に関する疾患を専門とする。落合院長は、相談しやすいアットホームな雰囲気も心がけており、患者の立場に立った親身な対応で治療に取り組んでいる。